

東京大学駒場キャンパスに残る第一高等学校の建造物や記念碑など

2015年4月25日（土）

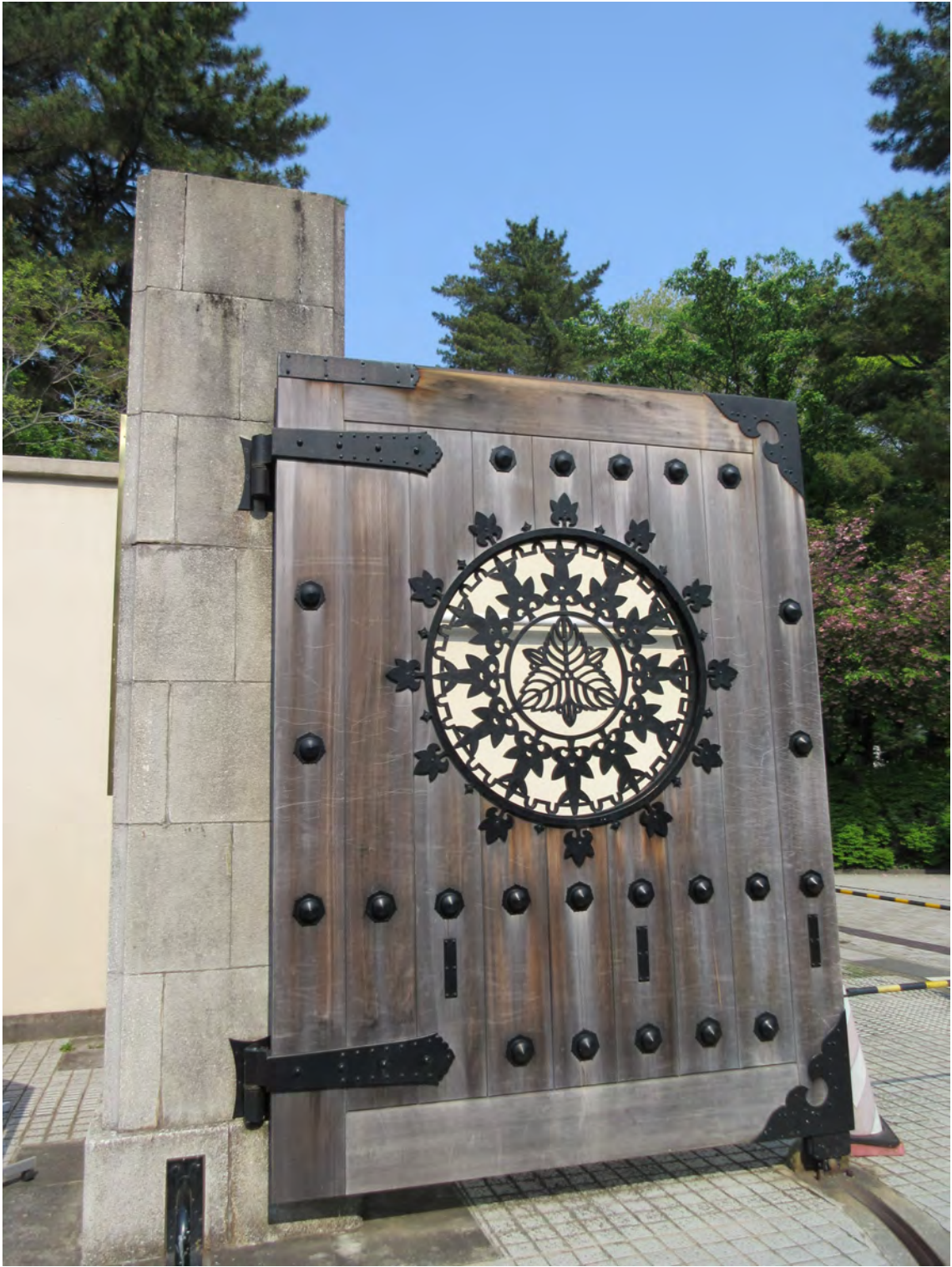
岡本祐幸

東京大学名誉教授朽津耕三先生に駒場キャンパスに残る旧制第一高等学校（一高）の建造物や記念碑などを案内していただいた（一部後日追加で撮った写真も含む）。

まず、正門には、柏葉と橄欖（かんらん、オリーブ）の一高の校章が現在でもはめ込まれている（柏は3葉、橄欖は3葉6実）。柏は軍神マルスの「武」を、また、「橄欖」は女神ミネルヴァの「文」を表し、「文武両道」を謳っているらしい。















東大駒場キャンパス正門の一高校章「柏葉と橄欖」と朽津耕三先生。



本館（現 1 号館）と時計台（なお、時計台は、寮歌では「うてな（台）」や「あららぎ（塔）」と読まれることがある）。





本館（現 1 号館）正面と入り口ドアの横に掛かる「有形文化財」登録票。





本館（現 1 号館）を北西側から望む。



本館（現 1 号館）の中庭から時計台を望む。



本館（現 1 号館）北側の一高校旗「護國旗」のレリーフ。



本館（現1号館）北側の一高校旗「護国旗」のレリーフ（下）。







本館（現 1 号館）北側「護國旗」のレリーフの近くの「一高下水」と書かれたマンホールの蓋。

一
水 下
高



本館（現 1 号館）北側「護國旗」のレリーフの近くのマンホールの蓋。





本館（現 1 号館）南東の橄欖（オリーブ）の樹と橄欖の碑。



本館（現 1 号館）南東の檝櫓の碑。



本館（現 1 号館）南東の橄欖の碑の説明文。



本館（現 1 号館）南東の橄欖（オリーブ）の樹と橄欖の碑と朽津耕三先生。



本館（現 1 号館）北東の柏の樹。



記念碑「一高ここにありき」と朽津耕三先生。左奥は講堂（900 番教室）。次ページは記念碑の裏の文章。講堂は正門を入れてすぐ西側に進んだところにある。



第一高等学校は明治七年（一八七四）東京英語学校として開学、東京大学予備門、第一高等中学校を経て、明治二十七年（一八九四）本郷向ヶ岡、即ち向陵の地にて第一高等学校と称す。昭和十年（一九三五）この地跡地に移り、昭和二十五年（一九五〇）学制改革により旧制高校としての終焉を迎え、その後は東京大学教養学部を引き継がれる。

この間、全国より選ばれた俊秀、若き日の三年をここに学び、高き志を養う。また多様な友らと皆寄宿制自治寮の生活を共にし、切磋琢磨して、教養を深め、人は如何に生きべきかを真摯に探る。卒業生はいずれもこれを誇りとし、生涯、この地を智慧と正義と友情に満ちた魂の故郷と懐く。

一高の校章は柏葉と楳櫨（オリーブ）を組み合わせ、ギリシャ・ローマ神話に基づき、楳櫨は文を、柏は武を象徴したものである。さらに柏葉と楳櫨の中央に「國」の字を配して、校旗とし「護國旗」と称した。これらはわが一高の精神的伝統を象徴するものである。

かくて一高は開学以来、良き伝統のもと二万余の有為の人材、ここに己を培い、広く各界に於いて活躍し、わが国の進運に大きく寄与した。

平成十六年（二〇〇四）開学百三十周年に当たり、かつ一高同窓会が本格的活動を終えんとするに際し、ここに貞石を留め、以て記念とする。緑あつてこの地に学ぶ若人、緑あつてこの碑を読む旅人、願わくはこの碑に込められた向陵精神を汲み、真摯な歩みに思まれんことを。

平成十六年（二〇〇四）十一月一日

一高同窓会理事長 三重野 康撰
碑銘 園部達郎 書



講堂（900番教室）前の朽津耕三先生。先生が一高生の頃、講堂の前の方で安倍能成校長の倫理の講義を聴いていたら、途中で後ろの方に座っていた原口統三ら学生数名が講堂を出て行ったので、呼び戻されて安倍校長に叱責された事件のことを伺った。寮生一同で校長への謝罪文を出すかどうかでもめたらしい。



嗚呼玉杯之碑。



嗚呼玉杯之碑

嗚呼玉杯の花うけて
 治世の夢に耽りたる
 白の雲小僧 君立つ
 芙蓉の雪の精を採る
 清き心の益妻夫が
 一度起ると何事なる
 濁るる海に漂へる
 逆巻く湧きをかき分けて
 尚武の風を帆にお受け
 花咲き老をうたわいて
 星霜移り人を古と
 我の乗る船は常へ不
 行途を拒む者あるは
 破邪の剣を抜く者
 魑魅魍魎も衆るる

緑酒は月影やと
 紫華は花依り見
 五空の健児意氣高夫
 芳野の花は華と春
 剣と筆とを執り持
 人世の倅業成りし
 我國民を救ふた
 自らの大能を
 舟出せしより十二年
 靈守し露の干き
 船とる舟師を
 理想の自給を
 斬りて捨つる何
 船は立ちてあ
 金波銀波の海静

杉野 久 敬 叙

矢野勘治

嗚呼玉杯之碑。



本館（現 1 号館）の北側を東西に走る銀杏並木「彌生道」。東端は寄宿寮（後の東大駒場寮）に到る。一高生がよく散策して思索にふけっらしい。



本館（現 1 号館）の東隣の特設高等科教室（現 101 号館）。



特設高等科教室（現 101 号館）の入口の近くの「一高下水」と書かれたマンホールの蓋。



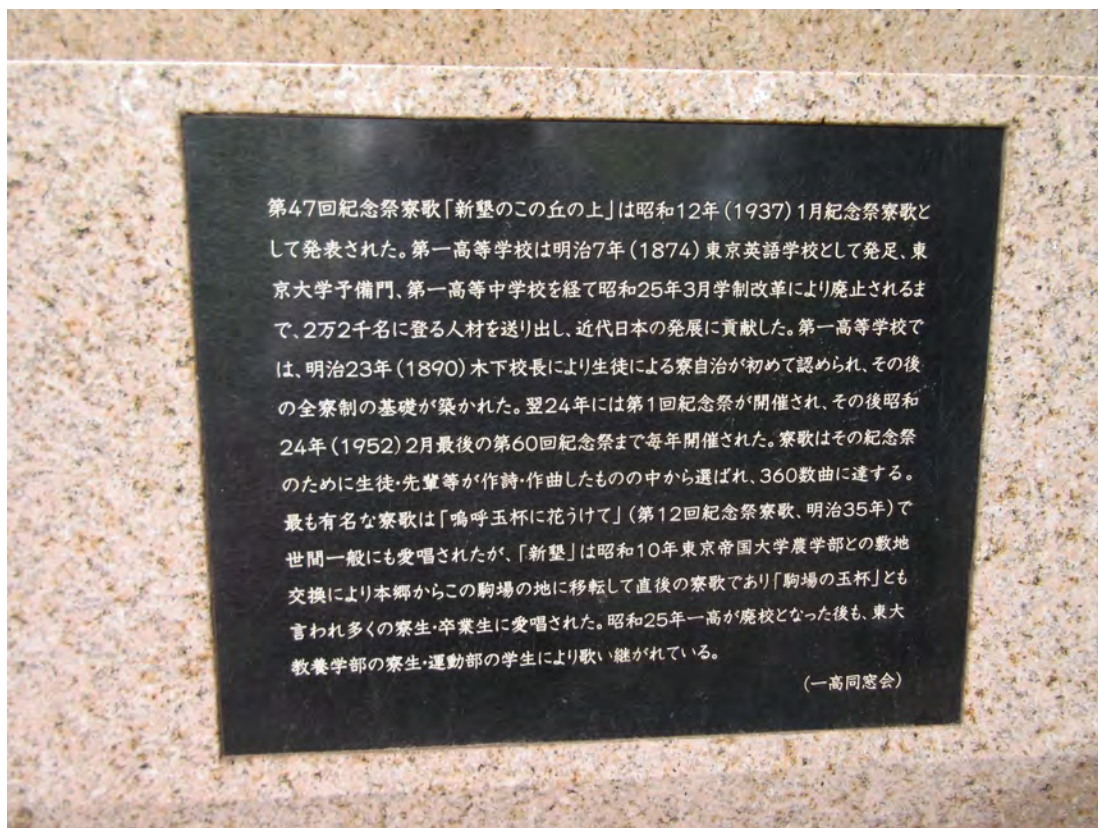
書庫及閲覧室（後の図書館、現駒場博物館）。正門と本館（現1号館）を結ぶ南北の線に対して、講堂（900番教室）と対称の位置にある。



第47回記念祭寮歌「新墾（にひはり）のこの丘の上」の記念碑と朽津耕三先生。歌詞の「移り来し二歳」は一高が本郷の彌生から駒場に移転してから2年たった（1937年）ことを意味しているとのこと。また、「三の城」とは、駒場の北寮、中寮、南寮の3つの寄宿寮のことだそう（4つ目の明寮は1939年に開寮）。更に、「『國民の重き責任』が重要なのです」とおっしゃったので、「ノブレス・オブリージュのことでしょうか」と問うと、「その通りです」とおっしゃった。



「新墾之碑」の裏側の歌詞と説明文。





第一高等学校寄宿寮跡。





第一高等学校寄宿寮跡

このコミュニケーションプラザの敷地にはかつて旧制第一高等学校寄宿寮が存在した。

旧制第一高等学校(一高)は明治7年(1874)東京英語学校として開校し、東京大学予備門(明治10年-1877)、第一高等中学校(明治19年-1886)を経て明治27年(1894)第一高等学校となり太平洋戦争敗戦後の学校制度改革昭和25年(1950)により廃止されるまで約2万2千名余の人材を送り出し我が国の発展に多大の貢献をした。

明治23年(1890)木下校長により本郷キャンパス(現在農学部)の寄宿寮での寮生による自治が認められ、その後第一高等学校廃止まで自治寮の制度は多くの困難を克服して、守られた。

昭和10年(1935)関東大震災を契機とした農学部との敷地交換によりこの駒場の地に移転したが、本郷の寄宿寮(8寮)は、新たな4棟の寄宿寮(南寮、中寮、北寮、明寮[昭和14年増設])となり寮生約1千2百名による自治寮運営は継続された。

一高寄宿寮の特徴は入学生全員が寮の生活を送ること(所謂全寮制)にあった。生徒は全員入寮し、立法(総代会)行政(寄宿寮委員会)をすべて生徒の自主運営によったのである。寮生による懲罰委員会による退寮の決定は学校からの退学とされた。寮の規模は南・中・北寮が各階自習室・寝室10室(3階)、明寮のみ自習室・寝室5室(3階)であり、寮の間を結ぶ渡り廊下からは本館(現1号館)、図書館(現駒場美術博物館)及び特高館(現101号館)への地下道が設けられた。この中庭にあるアーチは、地下道入口上屋の外壁の一部である。昭和24年(1949)学制改革により東京大学教養学部発足に伴い全寮制は廃止されたが、その後も東京大学駒場寮として寮生による自治は続けられた。



中寮跡地にあたる駒場コミュニケーションプラザ中庭では、柱跡位置に埋め込まれた照明によって、中寮の位置を確認することができる。



中寮の柱跡の位置に埋め込まれた照明（現 駒場コミュニケーションプラザ中庭）。



ツアーを終えて。朽津耕三先生と。